

く滝を直登して行くと、右岸に昔の鉾山の麁鉾があった。最後のゴルジュをすぎると、あとは二、三の五メートル滝で、水量も減り沢も終わりのようだ。適当な所でやぶに入り、久蔵森の西尾根に出て、久蔵沢を下り登山道に出る。

(記：ナ)

〔タイム〕

滑川八・二〇―ホラ貝沢出合九・一五―沢終了一三・三五―久蔵森西尾根一四・一五―登山道一四・五〇―滑川一六・四〇

カモシカ沢

(仮称)

一九七九年八月五日

◆天気(晴)

大滝沢F1でザイル訓練と写真撮影をしていたが、天気も良く時間も早いので、左岸の支流を偵察してみようということになり出発。

大滝沢本流に落ち込むF1はフリクションをいっぱいきかせて登り、最後の方は右側のブッシュをぞいに上げる。直登できないものかと上からザイルで確保してもらいな



帰路は懸垂下降の連続となった(カモシカ沢)

がら西さんが取り付いてみたところ、ホールドは細かいし、水は冷たいので散々な目に会う。それでもやつとの思いで何とか直登。ザイルで確保してもらっていないければとても登れたものではないとの話である。

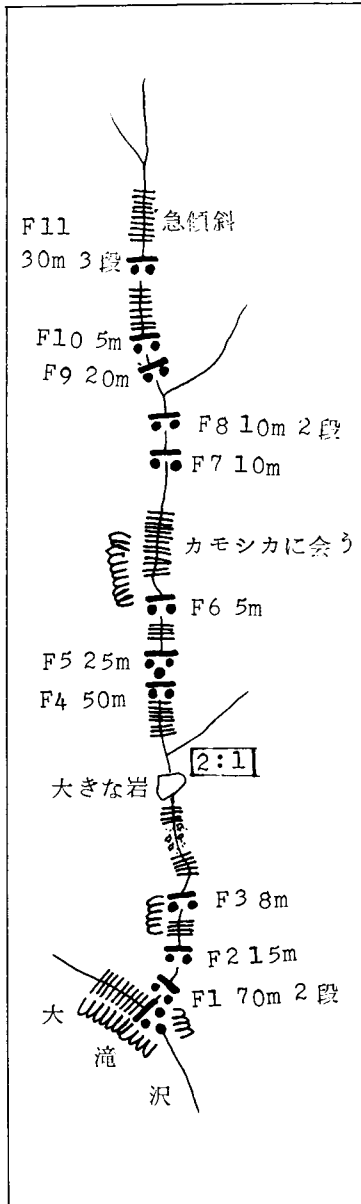
すぐにF2一五メートルがあらわれるがなんなく直登。ついでナメとなり快適である。F3八メートルも楽に直登。一時五〇分、大きな岩が沢をふさいでいる先で支沢が合流している。

一二時一五分突然五〇メートルの大きな滝がたちふさがった。幅は広いが登るにさほどの困難はない。各自が別々

のルートに登った。この滝の印象は強烈であったので、皆んなで仮に「奥の大滝」と呼ぶことにした。

更に一五分程進むとF5一五段が現われるがこれも直登する。またナメが続く。F6を越え五〇段程のナメを気持ちよく通過する。右岸上部にスラブを見て、その先もまた一〇〇段程のナメである。

トップの良弘さんがカモシカを発見した。子供のカモシカで、沢の中央に立ちこころもち首をかしげてこちらを見ている。西さんがすかさずザックからカメラを取り出し、写真をとろうと前に出たら、右岸からガラガラと落石。見上げたら大きなカモシカが走り去る所だった。



カモシカ沢 (作図：肇)

「きつと親カモシカだ」。「わざと石を落したんだ。」とひとしきり話題となる。もちろんこの間に沢の中央に立往生していた子カモシカは姿を消していた。

ふたたび廻行を続ける。F7一〇段を直登するとすぐF8一〇段二段。滝の連続である。一二時四〇分、沢が二分した。ここから二バーティーに別れ上部で合流を約束して、左俣を西さんと半沢君と私、右俣を良弘さんと安田さんである。

別れると間もなくF9二〇段に出会い直登。すぐF10五段が続いて、これも直登する。ナメをはさんでF11三〇段三段を越える。この上もナメが続くが急傾斜

となり水量も極端に少なくなる。一三時二五分ヤブこぎ開始。右岸の尾根上に出て一三時五五分右俣パーティと合流する。予期せぬ滝の連続でみんな満足。

帰路をどうするか相談した結果、今まで登ってきた沢をそのまま下ることに決定。懸垂下降を一三回くり返して、一七時滑川温泉より少し下った所の車デポ地に着く。充実の一日であった。

(記・世)

〔タイム〕

出合一一・三〇―奥の大滝一二・一五―二俣一二・四〇―沢終了一三・二五―右俣パーティ合流・下降開始一三・五五―大滝沢出合一六・四〇

前 川

一九七六年十月十七日

◆天気(晴)

赤滝沢と前川の合流点まで車で入り廻行の準備をする。秋も深まり、このあたりは紅葉がきれいだ。すぐ砂防ダムが三つ続く。あまり水量の多くない静かな沢である。右岸に湧水のみ小滝を越えると、五里程の滝とその

